



欧州・アルプスを歩く

— そこに行かなくては見えないものを“旅して” —

土門 孝 彰

(秋田銀行営業支援部 チーフアドバイザー / インспек株式会社 取締役
一般社団法人エレクトロニクス実装学会 電子部品・実装技術委員会委員長)

コロナ禍で長い間海外渡航が制限され、旅先で仕事を忘れ、初めて出会う人々や風景に心を動かされる機会が少なくなりました。エンジニアの現役時代は、台湾、中国、東南アジアの製造拠点への海外渡航、M&Aなどのミッションを携えて欧米各国の工場を訪ねる機会があったものの、気忙しく、訪問した町を観光することなく、あっという間に還暦を迎えた。人生の一区切りとして自分へのご褒美と妻への感謝を込めて、欧州・アルプスの町村を歩いた時の話を“流れる風景”のようにしたためてみた。

(1) はじめに

これまでIoT、5G、EV、DX、GXをキーワードにエレクトロニクス技術面からの視点で、社会課題へのアプローチにつなげるための方策を提言の形で寄稿してきたが、今回は少し肩の力を抜いて“穏やかに流れる車窓”“夕日の鮮やかな町”“アルプスの村々”の感激を思い出しながら旅の話をしてみたい。

私の海外旅行は、一般的な旅行会社の添乗員帯同のパック旅行とは異なり、日本から旅行先の国際空港までの往復チケットと目的地への拠点となる訪問地のホテルを自力で予約し、途中の経路チケットはできるだけパブリックな交通機関を利用すべく、自分で都度調査し入手する完全自由旅行であり、旅行ブックには載っていない“知らない町”も訪ねており、コースプロフィールなど旅行好きの人には何かの参考になるかもしれない。

(2) 4つの旅

第1章は2016年の夏に訪れたツェルマットからのマッターホルントレッキング、合間に訪ねたベルン、ルツェルンの旅。

第2章は2017年のグリンデルワルト、ミューレン、ザンクト・ガレンと2年連続して歩いたスイス・アルプスの旅。

第3章は2018年夏のオーストリアの旅。ウィーン、世界遺産の村：ハルシュタット、ザルツブルクの文化に触れる。

第4章は、2019年。北イタリア/ミラノ、ドロミテ、ベネチアを回ったプロセスを紹介する。

2020年以降、コロナ禍で海外旅行はしばらくポーズ状態である。

<第1章>いざ、ツェルマットからマッターホルンをめざして

2016年7月27日成田を出発、カタル航空を使い、ドーハ経由で28日にジュネーブ空港

よりスイス入りした。電車に乗り換え、車窓の右手にはレマン湖がアルプスの水を満々とたたえていた。レマン湖ほとりにあるオードリーヘップバーンが晩年を過ごした町：モルジュ、冬のオリンピックで有名なローザンヌ、チャップリンが愛した町：ベベイを眺めながら、パノラマ展望可能な車窓の電車は森と湖を抜けて進んで行った。さすがに観光立国スイスだけあって、電車の車掌さんは世界中の通貨やメディアチケットに対応し、手際よくお客さんへ対応している姿は印象的だった。また、施設の使用方法もピクトグラムを用いて誰でも分かるような表示がしてあり国際都市の自覚を十分に感じさせられた。

ヴィスプという駅で乗り換え、村々とトンネルを幾つも越えて目的地のツェルマットへと向かった。車窓から眺める川は、山岳の石を砕きながら流れ、白濁していた。

チケットは、1週間ほどの滞在であればスイストラベルパスをお勧めしたい。1等車は別料金であるが、2等車は期間中、スイス国内を自由に回れるためチケット購入の手間が省ける。

ツェルマットに到着し、CO₂を排出しない電気自動車や馬車がゆったりと走る村のメイン通りを歩いて、マッターホルンのシュヴァルツゼーのアプローチに近いフリというゴンドラ駅近くの宿へ到着。1週間同じ宿に連泊することで、天候に合わせ、晴天時は山岳トレッキング、雨天時はスイスの世界遺産都市をめぐる旅とした。

初日は朝早く出発するため、前日に地元のスーパーで買い出しをした。朝用、昼用のサンドイッチを手作りして、登山靴のひもをギュッと締め直して準備万端。シュヴァルツゼーのロープウェイで、登攀ルートのベースキャンプとなるヘルンリ小屋3,260mを目指した。途中の難所も憧れのマッターホルンの直下を体験できるモ

チベーションで苦にはならなかった。現地の親子連れは、石英鉱物の学習をしており、スイスならではのと感じた。ヘルンリ小屋へ到着した時は、この上ない満足感を得ることができ、この旅の目的をほとんど達成できた感があった。



(夕日に映えるマッターホルン)

2日目は、フリゴンドラ駅からトロッケナーシュテーク経由でマッターホルングレッシュャーパラダイス（欧州一の展望台）からアルプスを眺めることができた。また、マッターホルン周辺に点在する5つの湖を訪ね、途中で出会った野生のエーデルワイスは花言葉どおり、高貴で美しかった。

天候の悪いときは、スイストラベルパスで世界遺産の町：ルツェルンやベルンを訪ね、休養も含め体力と相談しながらゆっくり街歩きを楽しんだ。

夏の時期は、花も端麗で、町の家々も窓辺にたくさんの花を飾りつけしており、お勧めの季節であることには違いない。ツェルマットの最終日はスイスの独立記念日にあたり、夕方から夜にかけて花火が上がり、町中お祭り騒ぎで、間近に見るマッターホルンの登山道には松明が灯され格別の夜を過ごすことができた。

8月2日ジュネーブを出発し、ドーハ経由で成田へと帰路を選んだ。

途中、一人旅をしている日本人と会ってヒアリングをしたところ、“ミューレンが最高”とのことで次の年は、次の章で示すグリンデルワルトやミューレンを訪ねることとした。

<第2章>グリンデルワルト三山を望むミューレン村へ

2017年7月14日。成田を出発し、タイ航空・バンコク経由で、(今では考えられない)ロシアやウクライナ上空から大平原を眺めながらヨーロッパへと飛行し、チューリッヒ空港からスイスへ入国した。

チューリッヒからは電車に乗りインターラーケン経由でグリンデルワルトへ向かった。チューリッヒ湖やブリエンツ湖、トゥーン湖などの群青の湖面を眺め、湖畔沿いに童話に出てくるような白壁の建物を見ながら胸をワクワクさせた。グリンデルワルト駅からはアイガーやユングフラウヨッホを仰ぎ見ることができ、教会の鐘の音を聴きながらメイン通りを宿舎へと向かった。

ちょうど、アイガートレイルマラソンの競技中でもあり、世界中からトレイルランナーが色とりどりの服装で参加していた。宿舎近くのベッターホルンの夕焼けが一段と美しく翌日の山歩きも十二分に期待できるものであった。

次の日の朝、ホテルを後にグローセ・シャイデックのスタート地点より、のんびりハイキングで中間地点(フィルスト)を目指した。スイスの登山道は、日本のそれとは大きく異なり、家族連れで歩けるように整備されており、ベビーカーや車いすの方もゆったりとアルプスを堪能できるのが羨ましい限りであった。フィルストからバッハアルプジーの湖へ、牛と一緒に昼寝をしながら標高2,265mの天空の湖を廻る快適なトレイルを過ごした。



(アイガー・メンヒ・ユングフラウヨッホ三山)

2日目は、20年ぶりにクライネシャイデックを訪ねた。アイガー・メンヒ・ユングフラウヨッホ三山も最高の見晴らしで、途中、断崖絶壁にあるミューレン村を眺めることができた。登山鉄道でトップ・オブ・ヨーロッパへ向かい、アイスメアを経由しユングフラウヨッホ展望台のスフィンクス展望棟へと歩を進めた。20年前は雲で見えなかったが、世界のアレッチ氷河も堪能した。

ユングフラウヨッホの帰り道、アイガーグレッチャー駅で下車してスイスの絶景ハイキングコース“アイガーウォーク”をトレッキング。大迫力の氷河を間近で見ることができるのも、このコースの醍醐味の一つであった。アイガーがかぶさるように迫ってくる荒涼とした中を歩きながら、爽快な気分を味わうことができた。

3日目は、目的としていたミューレン村へと向かった。断崖絶壁の村だけあって、途中陸路が途絶えロープウェイで渡る箇所があった。生活道路の為、ロープウェイの扉の開け閉めは搭乗者がそれぞれ行う仕掛けとなっていた。この点は一般の旅行雑誌では掲載されていない内容である。

ミューレンでは駅前の歴史のあるホテルに宿泊した。夜はアイガー山の上に一番星が輝き、朝は霞の中から三山が現れ、午後の夕立の後に山にかかった虹もこの上ない自然の恵みであった。映画「007」のロケも敢行された箱庭のよう

な小さな村であり人口は500人ほど。400年も続いている村だという。自然の恵みを存分に生かしながら観光で生計を立てている。二泊では到底足りないくらい、静寂に包まれた魅力的な村であった。

人口減の秋田にも何かこの辺にヒントがありそうな気がした。

ミューレンの端に位置する、秘境のシュテッヘルベルクも忘れられない地であった。氷河が形成したU字谷の底にあり、断崖から幾筋もの滝が流れ落ちていた。

翌日は、ラウターブルネン経由で世界遺産の歴史の町ザンクト・ガレンへと向かった。修道院、世界一美しいと言われる図書館、大聖堂、旧市街を散策。高台からポーデン湖を眺めながら隣接するオーストリアへと思いを馳せた。

帰路は、7月21日にチューリッヒからバンコク経由で翌22日に成田着で帰国した。



(ミューレン遠景)

<第3章>芸術と音楽を希求するウィーンとザルツブルクの旅

2018年7月14日、成田を出発し、タイ航空・バンコク経由でオーストリアの玄関口ウィーン国際空港へと到着した。

朝の到着にもかかわらず、ウィーン市内にあるベルベデーレ宮殿、美術史博物館を足繫く回った。クリムトの“接吻”の絵画や小中学校の教科書に出てくるブリューゲルの“バベルの塔”の絵画と対峙した。やはり本物の迫力に何とも言えない存在感を感じた。

ウィーンの楽友協会・黄金の間でモーツァルトコンサートを鑑賞し、クラシックの殿堂に触れることもできた。

芸術の街ウィーンを後にし、音楽の街であり映画“サウンド・オブ・ミュージック”の街、ザルツブルクへと向かった。タクシーで映画の舞台を回り、映画音楽やトラップファミリーが今でも息づいているような現地の様子を味わうことが出来た。

ザルツブルクからウィーンへの折り返しで、世界遺産の町、ハルシュタットを訪ねた。小舟（秋田県の奥森吉の観光船の規模）で渡ると、そこには「オーストリアの真珠」と呼ばれる世界一美しい湖畔の町があった。ダハシュタイン山から観るハルシュタットは、感動と静寂の小さな町であった。



(ダハシュタイン山塊より臨むハルシュタット)

夕刻ウィーン市内に戻り、ベートーベンのゆかりの地を歩いた。「ベートーベン博物館」を見学した後、坂道を歩くとベートーベンが愛したワイン居酒屋「マイヤー」があった。テラス席で地元の人々がアコーディオンの生演奏を聴きながらゆっくり食事と会話を楽しんでいる。手作りのチーズとザワークラウト、ジャガイモ料理をお供にワインを堪能した。すべての五感を刺激するような場所であった。

再訪することを祈念して、7月21日、ウィーンを発ち、オーストリアの思い出を詰め込んで22日に帰国した。

<第4章>北イタリア/ミラノとベネチア紀行

4つ目の旅は、イタリアのミラノからコルチナダンペッツォ経由・ベネチアの旅である。

2019年7月12日、成田をアエロフロート機で出発しモスクワで乗り継ぎ、イタリア・ミラノに入った。

ゴシック式の大聖堂ドゥオモやスカラ座を訪ね、サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会にある“最後の晩餐”(レオナルド・ダ・ヴィンチ)を鑑賞した。前室があり、25~30人の見学者を数分ずつに区切って鑑賞を許しており、絵画の劣化を防ぎつつ運営している様子がよくわかった。世界大戦により爆撃も受けたが修復を繰り返しながら1980年の世界遺産へと継承している。

ミラノを後にし、ドロミテ山塊をトレッキングするためにボルツァーノに一泊した。ドイツの堅実さとイタリア的な明るさが入り混じった街であった。

この後の行程は旅行雑誌には載っておらず、自力調査でルートを探索して進んだ。

ボルツァーノから欧州最大の放牧地を訪ね、ドッビアーコを起点とした「三つの山の頂き」

を意味するドライチンネ山脈を周遊すべく歩みを進めた。バック旅行では一部の小屋への訪問が一般的であるが、我々は大いに欲張り、アロンツォ小屋、ロカテッリ小屋、ラングアルム小屋をすべて踏破することができた。地元の若者がドローンを用いて山岳撮影をしており、当時は、とても新鮮に感じた。



(ドライチンネ山塊)

2026年の冬季五輪の開催地に決まった、“ドロミテの真珠”：コルチナダンペッツォに立ち寄り、最終目的地のベネチアへと向かった。コルチナからベネチアへは、2時間半ほどの直通のバスがあり、車窓の景色からは文化の異なる町への期待が大いに膨らんだ。

街に到着した瞬間から、全く異質の空気が感じられた。ヨーロッパと東方オリエントの文化が融合した水の都であり、海拔ゼロのベネチアは、3年後の完成をめざしたモーゼプロジェクト(ベネチアのベネタ潟の入り口を可動式の水門で制御して冬から春にかけて一時的に海水が都市に流入するアックア・アルタに備える計画)を推進している途中でもあり、稀有な観光と歴史の街を守ろうとしている人たちの努力が感じ

られた。

水上バスに乗って、ベネチア本島周辺のレース編みやカラフルな街並みのブラーノ島、ベネチアンガラスで有名なムラーノ島も計画通り訪ねた。それぞれが個性的な島々であることを肌で感じた。

ドゥカーレ宮殿、サンマルコ寺院と広場、リアルト橋、カナルグランデ、アカデミア美術館、サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会などナポレオン時代に思いを馳せながら余すところなく水上タクシー、バスを駆使して回りに回った。

映画「旅情」の舞台になった地でもあり、ヨーロッパ最古の喫茶店“カフェフロリアン”も風格があった。ベネチアンガラス工房など、地元の人々のサービス精神も旺盛でスペシャルな時間を過ごすことができた。

帰路は、ベネチアからミラノへ電車で戻り、7月19日ミラノのマルペンサ空港からモスクワ経由で成田へ帰国した。

ロストバゲージのおまけつきであったが、盛りだくさんの北イタリア紀行であった。

(3) 終わりに

2016年から2019年までの私旅行記の一握りを駆け足で述べさせた頂いた。その後、コロナ感染が全世界に広がり、海外旅行に出かける機会もなく、そうこうするうちにウクライナでの戦争、中東での紛争など精神的にも暗い日々が続いている。ましてや円安が長く続く状況でこれまでの4年間の旅行は夢のような時期だったと改めて感じている。

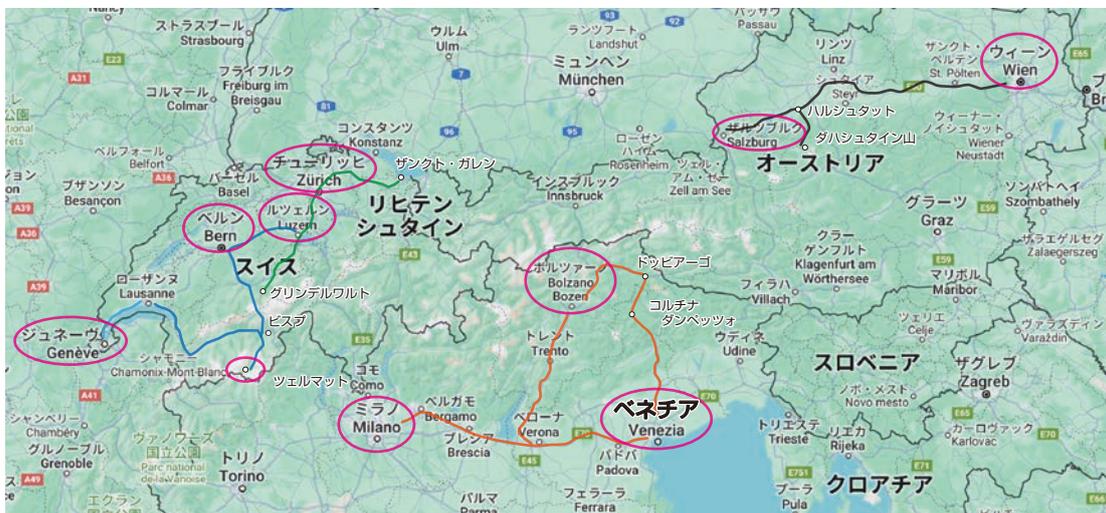
最近では3D-VR技術などのメタバース技術を駆使して自宅でも旅を体感できる時代ではあるが、そこに足を運ばなくては見ることができないものもあり、現場、現物、現実の3つの“現”を重視し、本物に触れる感動は、失くしたくないものである。

振り返ると、長期（海外）旅行実現の条件として、旅する場所、経路の平和、治安、安全性は基より、本人の健康、若干の資金、家族周囲の理解、職場の協力どれ一つ欠けても実現できず、一番幸せな時期だったのかもしれない。

これまでもこれからも周囲に感謝を忘れず、新たな旅を計画したいものである。

欧州旅行のルート

- 青ルート 2016年 ジュネーブ～ツェルマット～マッターホルン～ベルン～ジュネーブ
- 緑ルート 2017年 チューリッヒ～ルツェルン～グリンデルワルト～ザンクト・ガレン～チューリッヒ
- 黒ルート 2018年 ウィーン～ザルツブルク～ハルシュタット～ダハシュタイン～ウィーン
- 赤ルート 2019年 ミラノ～ボルツァーノ～ドブリアーゴ～ドロミテ～コルチナダンペッツォ～ベネチア～ミラノ



Googleマップより作成